自然共生型の滞在観光地づくりとおもてなし観光の基盤づくりを目指して

釧路湿原・阿寒・摩周観光圏が始動

「元気がもどり湯」スタート

現在、全国45地域で複数の観光地が「観光圏」というエリアを構成し、さまざまな事業者の広域的な連携によって、滞在型の観光地づくりを進めています。北海道内では5つの地域(「富良野・美瑛」「さっぽろ」「知床」「はこだて」「釧路湿原・阿寒・摩周」)が、国土交通省から観光圏として認定を受けています。

弟子屈町は、釧路市と自治体や関係団体などで「釧路湿原・阿寒・摩周観光圏」として協議会を組織。釧路湿原と阿寒の2つの国立公園を有し、摩周湖や屈斜路湖などの自然資源や川湯・摩周・屈斜路・阿寒といった多彩な泉質を持つ温泉に加え、タンチョウや阿寒湖のマリモといった国の特別天然記念物、豊かな自然の中での体験プログラムなど恵まれた資源を生かし、5年計画で2泊3日以上の国際滞在観光地づくりの取り組みを開始しました。

3,000円分の入浴ポイントがついて、販売価格は1,500円と大変お得な「湯巡り手形」。町内では、㈱ツーリズムてしかがと参加施設で販売されています。

既に、弟子屈2daysえこパスポートの循環バスと連携し、阿寒湖～JR摩周駅をつなぐ定期バスに地元ネイチャーガイドを乗車させ、乗車したお客さまにお互いの地域をPRし、次の地域への楽しみを増大させるといった試みもスタートしています。また圏域モデルルートとして、ネイチャークルーズやウオーキングツアーを盛り込んだ着地型旅行商品も発売されています。

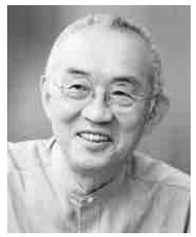
9月1日からは、北海道を代表する「川湯」「摩周」「阿寒」温泉ならではの湯治「元気がもどり湯」に親しんでいただけるよう、お得に温泉巡りができるポイントクーポン券「湯巡り手形『元気がもどり湯』」も販売しています。

「元気がもどり湯」とは、その昔、湯治場として有名な川湯温泉を訪れた皆さんは、泉質が強酸性で肌への刺激が強いため、しばらく滞在した後は1日アルカリ性の摩周温泉などで「湯直し」をしてからまた戻る「もどり湯」という湯治手法を取っていました。

当観光圏では、この経験に裏打ちされた湯治の慣習に着目し、多彩な泉質を巡る湯巡りと自然散策やトレッキングなどを組み合わせて、健康増進(＝元気が戻る)を図るこの湯治を「元気がもどり湯」としてたくさんのお客さまにご利用いただき、域内での滞在時間の延長、さらには域内での消費の拡大を目指しています。

9月1日には、川湯温泉のホテルで「元気がもどり湯」のスタートを記念し、登山家の田部井淳子さんをお招きし、記念講演会も実施されました。

釧路湿原塾 月尾嘉男塾長 講演会
「地球環境とエコツーリズム」



日時／9月10日(金) 18:00～19:30
会場／川湯ふるさと館
講師／東京大学名誉教授 月尾嘉男氏
テーマ／地球環境とエコツーリズム
入場／無料(どなたでも参加できます)

てしかがえこまち推進協議会と釧路湿原塾は、東京大学名誉教授の月尾嘉男氏を塾長としてお招きし「釧路湿原塾移動塾in川湯」を開催します。

講演では「地球環境とエコツーリズム」をテーマに、自然と人との共生や、今後、国は、地域は、どのような方向へ向かうのかも含めて講演していただきます。

月尾教授は1942年生まれ。東京大学教授を務め、現在は名誉教授。専門はメディア政策システム工学です。02年には省外から初めて、総務省審議官に就任しました。

カヌーをはじめ、アウトドアが大好きで、釧路川でも定期的にカヌーを楽しむなど、自然と人との共生を実践しています。04年には、南アフリカの南端、喜望峰をカヤックで回り、ケープホナーの称号を受けています。

また、世界各国を飛び回り、著書も多数、テレビ朝日系の「報道ステーション」のコメンテイターなども務めるなど、幅広く活躍しています。

入場は無料です。ぜひご参加ください。

❑問い合わせ先／てしかがえこまち推進協議会☎4822-2940(役場観光商工課内)、または釧路湿原塾事務局☎090-1640-2667(星)まで。

原野紀行

更科源藏(さらしなげんぞう)
●1904(明治37)年、弟子屈町熊牛原野(南弟子屈)に生まれ、1985(昭和60)年に81歳で逝去。東京麻布獣医学校を中退した後、尾崎喜八、高村光太郎に師事し、詩作を中心に郷土史、アイヌ文化研究など主に文学活動を続けた。
▶弟子屈町で所蔵しているさまざまな資料を紹介する。

著書の検印などに使っていた自作のエゾシカ印

移設された碑の全景

『原野の樹』その後

更科が1985(昭和60)年9月25日に没した後、弟子屈でも「原野忌」が催されました。1993(平成5)年の「原野忌」で、永田洋平や森川勇作たちが、更科の文学碑建立のときの「両親の開拓した土地に小さな碑を残したい気持ちはなくもないが…」という言葉を、参会した有志に話します。

この話はすぐに了解され、早速実行委員長を永田洋平に「更科文庫」に携わった弟子屈町商工会青年部が実働部隊で動き出しました。

碑となった石の寄贈と土地使用については、それぞれ更科の近親者からの好意があり、資金は協賛金や寄付金と町からの補助金でした。1994(平成6)年9月25日「棒の杭でも…」の更科の言葉が『原野の樹』と『更科源藏先生 生誕之碑』として、父母が鍬を下ろした熊牛原野に建立されたのです。

永田たちがこの碑を『原野の樹』と名づけたのは「原野」は更科を生んだその土壌で、「樹」は原野に根を張り、優れた種子を宿す精英樹を象徴したものでした。

(『原野紀行』第24回参照)

永田洋平や森川勇作たちには、もう一つの計画が残っていました。

更科は、大正の終わりから昭和の終わりまで文学活動をし、日本の近代文学と現代文学の橋渡しとなりました。また、アイヌ文化を在野で研究した資料など、貴重な財産を残してくれています。この資料を一堂に展示し、文学やアイヌ文化の研究に役立つような情報を発信する『更科源藏文学館』の建設。それが、もう一つの計画だったのです。

この館は2007年4月、町が、摩周観光文化センター内にあった〝一市九ヵ町村の物産館〟を改修して〝文学館〟にはできなかったのですが「更科源藏文学資料館」として開館させました。

永田洋平や森川勇作たちは『更科源藏文学館』と『原野の樹』が、熊牛原野の生誕の地で一対になることを望んでいました。しかし、文学資料館が完成したときには永田洋平は没していたのです。このことを知る更科源藏文学賞の会の髙田中は、永田洋平らの思いどおりではなかったのですが「更科源藏文学資料館」の完成の年、第3回更科源藏文学賞贈呈式の日に合わせて『原野の樹』を生誕の地熊牛原野から、弟子屈原野の摩周観光文化センター前庭に移設建立したのです。